

報告

冥王星をネタにした天文普及活動の実践報告

作花 一志 (京都情報大学院大学)

1. はじめに

松村会長の檄文[1]に応じて、昨年10月以降、冥王星をネタにした普及活動を行った。

10月 2日 京都大学総合人間学部(講義)

10月 20日 京都コンピュータ学院
(プレ学院祭講演会)

11月 11日 ダイニックアストロパーク天文
究館(親と子の天文教室)

11月 18日 長浜市国友町会館(図1)



図1 滋賀天文の集いにて

そして、12月10日に大阪市立科学館で行われた天文教育普及研究会近畿支部会の報告で締めくくった。これまでの参加人数は正確にはわからないが、少なくとも全部で400人には聞いてもらったと思う。冥王星が惑星から除外されたことは、ほとんどの人が知っていた(知らない人が聞きに来るはずはないが)。何しろ深夜のTVで天文の臨時ニュースが流れるなんて、空前絶後のことだろうから。しかし「惑星が減った」、「冥王星は格下げされた」、さらには「冥王星という名前がなくなった」と思っていた人もいた。これを払拭せねばならない。

2. 講演の内容

内容はほぼ筆者のウェブサイト[2]に沿っている。

1) 冥王星の発見

冥王星の歴史は1930年の発見時に始まるのではなく、海王星の発見直後ルベリエが予言した1846年まで遡る。私財をつぎ込んで悪戦苦闘したローエル、写真乾板上で何万という星を調べて幸運にも発見したトンボーに至るまでを物語る。この過程は「まぼろしの惑星」[3]の内容を参考にさせていただいた。また冥王星以外の惑星名の由来にも触れた。

2) 冥王星の受難

やっと見つかった冥王星は、海王星の内側に入り込むなど変な軌道を描く。1977年に衛星カロンが発見されてはじめて質量が求められた、ところが冥王星の質量は月よりも小さい、とケプラー第3法則の話をする。1992年最初のKBOが発見され、その後、続々と見つかる度に太陽系のイメージは膨れ上がる。今世紀に入ってから、クワオアアやセドナなど大型KBOが追い上げ、プルートに肉薄してくる。そしてついに昨年UB313が登場した。もうアカン。

3) 冥王星の再出発

IAU決議[4]については詳しく話していないが、「冥王星は上記の定義によって dwarf planet であり、トランス・ネプチュニアン天体の新しい種族の典型例として認識する(冥王星についての決議 6A)」のだから、これは冥王星にとっては降格ではなく再出発なのですと強調した。

・元第9惑星プルートはMP134340

・元第10惑星候補エリスはMP134340

という番号がついたが、決して改名ではない。そこで後鳥羽上皇の歌を本歌としての駄作を一首。

われこそは独立したての冥(よみ)の王
ドワーフ惑星こころして来よ

dwarf planet については、マスコミ報道ではすぐに「矮惑星」という訳語が使われたが、正式な和名が決まるまでは英語をそのまま使いましょうとした。

プレゼンには各種音声も挿入したが、プルート・ケレス・ペルセポネの物語朗読やローエルとトンボーのバーチャル会話制作には、京都コンピュータ学院の教職員に協力していただいた。また、図2は本学院の学生に描いてもらったCGのひとつである。

「ルベリエに始まり、多数の人々が捜し求めた新惑星は存在しなかった。果たしてローエルやトンボーの作業は無駄だったのだろうか？ 彼らの観測は失敗だったのだろうか？ いや、そのおかげで無



図2 プルート

数の新天体が発見され、私たちは数十倍にも広がった太陽系の姿を知ることができるようになった。彼らはたえず夢を追い求め、死の前年まで観測を続けるという逞しさを示し、諦めず屈せず努力することの尊さを私たちに教えてくれたのだ。」・・・というスライドで締めくくった。

終了後の最も鋭い質問は、ダイニクアストロパーク天究館で小学校5年生の男の子からの「冥王星が海王星の内側に入っているが、衝突はしないのですか？」だった。これにはヒヤッとした。3:2の共鳴なんて言ってもダメと自分に言い聞かせつつ、何とか答えたが、納得はしてもらえなかったと思う。

また、会員のK氏からは「えろう手間のかかるもの作らはったなあ」というコメントをいただいた。

3. 惑星と游星

以下は、天文教育普及研究会・近畿支部会

のみで紹介したことである。

「惑星」という言葉は、一説によると、オランダ通詞の本木良永(1735-1794)の創案した訳語で『太陽窮理了解説』(1792年)で使われているそうだ。また「游星」という言葉は、同じく通詞の吉雄俊蔵(1787-1843)の作ったものらしい。彼の書いた『遠西観象図説』(1823年)という西洋天文学を紹介した本には「六星ト衛星ト併セテ十七箇コレヲ游星ト云フ」と書かれている。六星とはもちろん水金地火木土である。游星(遊星)は山本一清が東京に対抗して使った言葉と思っていたが、江戸時代後半には惑星と並んで使われていたようだ。図3は、知人から借用して現在手元にある『遠西観象図説』上中下の現物(大阪市立科学館員の鑑定による)である。

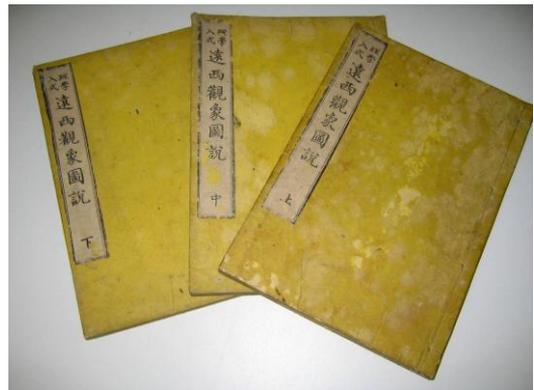


図3 遠西観象図説

参考文献

- [1] 松村雅文 天文教育 Vol.18 No.5 p60 2006
- [2] 作花一志 <http://www.kcg.ac.jp/kcg/sakka/MP/pluto1.htm>
- [3] 仲野誠 <http://www.cgh.ed.jp/TNPJP/nineplanets/hypo.html>
- [4] IAU 総会 <http://www.iau.org/iau0603.414.0.html>

作花一志